【訳注】

「徐霞客遊記」訳注稿　名山遊記篇（二）――「遊嵩山日記」

薄井俊二

はじめに

本稿は、明末の徐宏祖（一五八六～一六四一年）による「徐霞客遊記」の訳注を試みたものである（1）。今回は、一六二三年の中岳嵩山への遊記を訳出した。

徐霞客の旅行のうち、遊記の残るものは十回を数える。そのうち、旅の目的などを記した序文があるのは、四回目の福建省九鯉湖への遊、十回目の西南遊、そして五回目の本稿の遊だけである。その序文によれば、元々湖北省の武当山を経由して四川省の峨眉山への旅を構想していたが、母親の孝行のために遠距離の行程は避け、嵩山・華山を経由して、武当山を最終目的としたという。二月一日に出立しているが、記録は十九日から始まる。移動手段は不明。平地はだいたい山轎が多いようであるが、二十四日条に「策騎」の語が見え、そのときは騎乗だったのだろうか。

紙幅の関係で、口語訳と語注のみとした。徐霞客の自注は「　」で示した。（　）で現在の地名を記す。

底本は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年）とし、諸書を参考にした（巻末参考文献参照）。

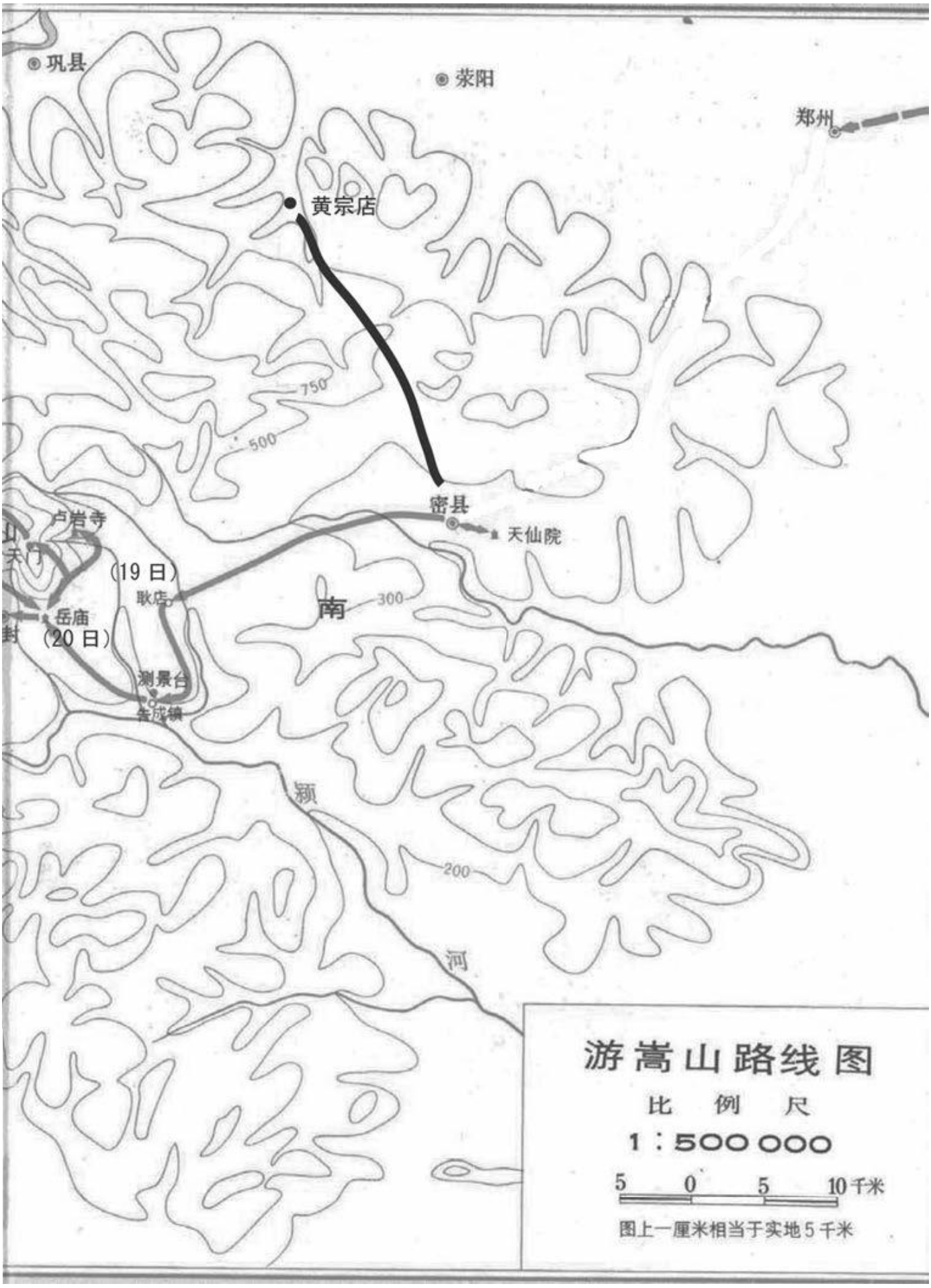
掲載の地図は、褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』を加工したものである。

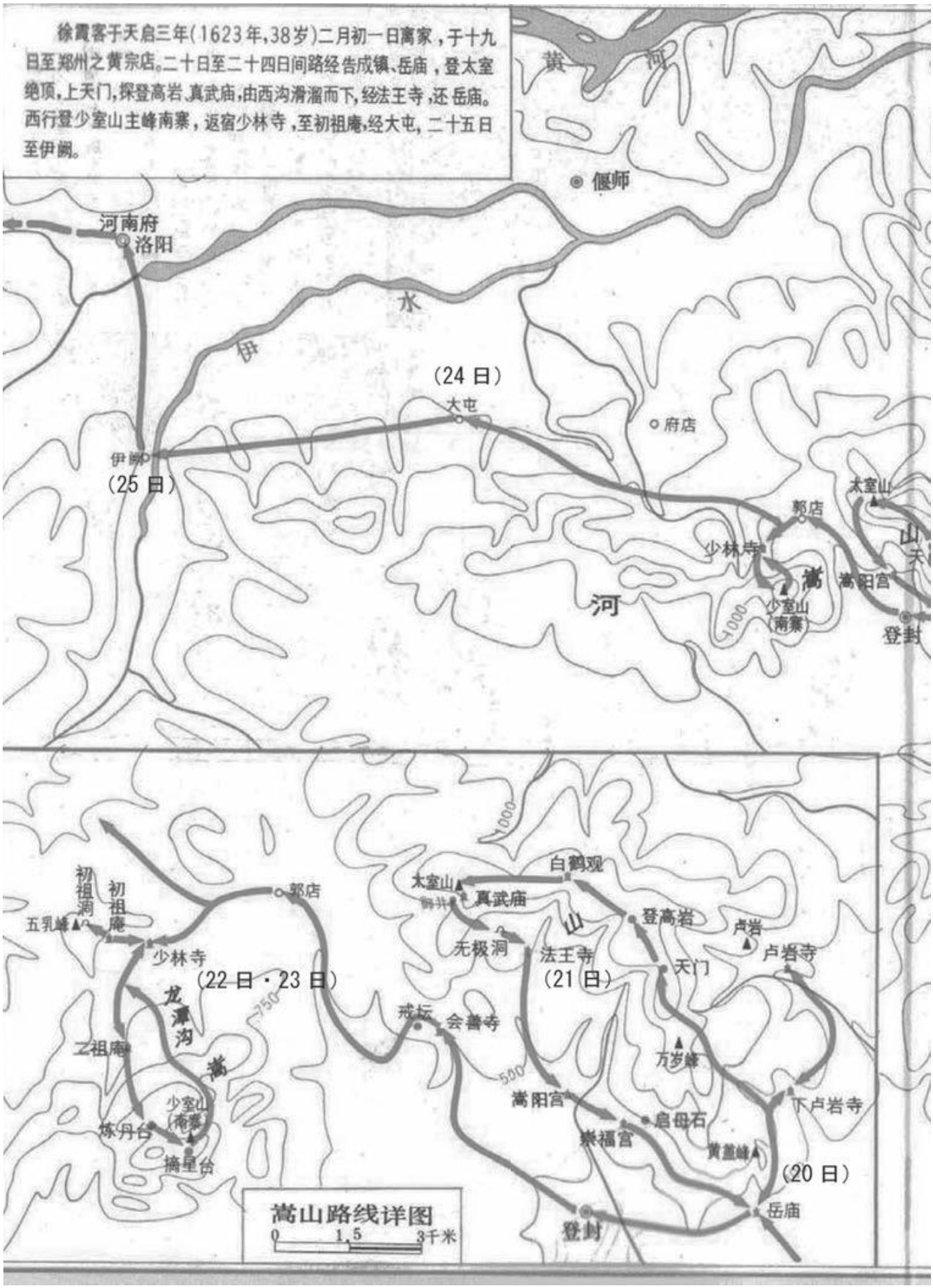
訳注の部

巻一

遊嵩山日記〔河南河南府登封縣〕

私は、幼い頃から五岳に対する志を抱いていた。しかし玄岳太和山（武当山）は五岳の上にあるものであり、それへの思慕の念は五岳よりも高いものがあった。ずいぶん前から、先ず先駆けとして湖北省の襄陽府と鄖陽府との間にある太和山を訪ねて、更に北上して陝西の華山に登り、次いで剣閣にある連なる雲棧を通って、四川の峨眉山へ行く、という大旅行を心に描いていた。しかし母親が年老いてきたため、志を変更して遠距離の遊行は避け、太和山までの旅行を先ず行い、親への孝行を優先させることとした。ただ、長江や漢水などの流れを遡及するのでは日数がかかりすぎるので、陸行して進み、帰路を船で下ってくる方が時間が短くてすむのでよいと考えた。また、南側の襄陽から鄧州・汝州を通って嵩山に至る陸路の道のりは、北側の汴（開封）から嵩山を経て陝州に至るものとほぼ同じくらいである。加えて、開封経由の陸路を取れば、嵩山・華山のどちらをも訪問した上で、最後に太和山にご挨拶できる。かくして


巩县
荥阳
郑州
黄宗店
750
500
密县
天仙院
卢岩寺
(19 日)
耿店
300
南
岳庙
(20 日)
测景台
告成镇
颍
200
河
游嵩山路线图
比 例 尺
1：500 000
5 0 5 10千米
图上一厘米相当于实地5千米


徐霞客于天启三年(1623年,38岁)二月初一日离家,于十九日至郑州之黄宗店。二十日至二十四日间路经告成镇、岳庙,登太室绝顶,上天门,探登高岩、真武庙,由西沟滑溜而下,经法王寺,还岳庙。西行登少室山主峰南寨,返宿少林寺,至初祖庵,经大屯,二十五日至伊阙。
黄河
偃师
河南府
洛阳
伊水
(24日)
大屯
府店
伊阙
(25日)
郭店
太室山
少林寺
嵩阳宫
少室山(南寨)
登封
河
山
天
1000
白鹤观
太室山
真武庙
登高岩
卢岩
卢岩寺
无极洞
法王寺
(21日)
天门
郭店
初祖洞
初祖庵
五乳峰
少林寺
(22日·23日)
龙潭沟
750
戒坛
会善寺
万岁峰
嵩阳宫
500
下卢岩寺
启母石
崇福宫
黄盖峰
(20日)
岳庙
登封
二祖庵
少室山(南寨)
炼丹台
摘星台
嵩山路线详图
0 1.5 3千米

嵩山から始める陸路を取ることと決し、天啓三年二月一日を以て旅を始めた。

［注］玄岳太和山―湖北省丹江口市にあり、周囲四百キロメートル、主峯の天柱峯は海抜一六一二メートル。真武神人（玄武神）が得道した聖地とされ、道教の聖地であったが、明代に永楽帝が復興して宮観を大いに調え、山名を太和山と改めて太岳の号を与えた。嘉靖帝は更に宮観を整備し、名を玄岳と改めて五岳の上に置いた。　遠距離の遊行は避け―原文は「有方之遊」。『論語』里仁に「父母在、子不遠遊、遊必有方」とある。方は一定の規律。規律を守って危ない目に遭わないようにする、ということ。

二月十九日

十九日かかって、河南省鄭州の黄宗店（王宗店）に至った。まちの右から石畳の坂を上り、聖僧池を鑑賞する。清らかな水を湛えた池が、緑なす山の半ばに留まっている。山から見下ろせば、深い谷川が縦横に伸びて重なりあっているが、一滴の水もない涸れ谷である。斜面を下って涸れ谷の底を進み、香爐山に沿って、曲がりながら南へ向かう。香爐山の形は、三つの峯が聳える様が鼎を逆さまに伏せたかのようで、たくさんの山々がこれを取り囲んでおり、その美しい様は見る人をして喜ばせるものがある。谷底は、乱立する石でいっぱいで、紫の玉の如き姿を現している。両側は石の壁がうねうねと続いているが、その膚はやや精密で湿潤な感じがする。ここを清流があふれ流れていたときのことを想起してみると、泡立つ水しぶきが珠玉のように輝き、黛のように青々とした淵が満々と水を湛えていたのであろう。どのようなすばらしい景色だったのだろう。

十里進み、石仏嶺に登る。

さらにまた五里で、密県の県域に入る。遙か嵩山を望むに、まだ六十里以上もある。分かれ道から東南に二十五里進み、密県城を通り過ぎて、天仙院に至る。

この院には天仙を祀っている。天仙とは黄帝の三女である。白い松が、祠の後ろの中庭に立っている。言い伝えによれば、天仙がここで肉体を脱して昇仙したとのことである。松は大人で四抱えほどもあり、根本はひとつなのが三つの幹に分かれ、それぞれが空に向かって雲に入らんばかりに伸びている。樹皮はなめらかでまるで脂肪を凝らした如く、白粉で装ったような美しさがある。枝は龍のように曲がって蟠り、馬のたてがみのような緑の葉は風に舞い、頭をあげ、胸を張るように、天空へ向かってすっくと美しく立っている。誠にすばらしい景観である。松を石の欄干が取り巻いている。北に一棟の長廊が延びており、そこには詩や聯を記したものがたくさん並んでいる。しばらくそこを参観したのち、下の方へ下り、滴水を見る。渓流はここで急に下へ落ち込んでおり、崖がその上を覆い、水が落下する音が聞こえる。

密県城に引き返し、さらに西門に至る。

そこから三十五里進み、登封県（登封市）の県域に入る。ここは耿店（盧店鎮）という。ここから南へ向かうのが石淙への道である。今日はここに泊まることとする。

［注］天仙―天仙聖母碧霞元君、天仙娘娘ともいう。南の媽祖と並び、主に華北で尊崇されていた女神。

二月二十日

小道に沿って南へ進む。二十五里の間、丘や不規則な高地が続く。しばらくして、小川に行き当たる。これを渡り、更に南に、丘の尾根を進む。そこから下を俯瞰すれば、石淙が見渡せた。

私は開封の方からやって来たので、この間の土地は平らで広々としており、古来より「陸海」と称されるのもよくわかった。平地の上には、河川があまりなく、あったとしても岩石があるものではなかった。それが嵩山に近づいて来て初めて、うねうねと起伏のある山々を見ることになった。かくして北流するものには景渓や須渓などの諸渓があり、南流するものに潁水がある。ただしこれらの諸河川は、いずれも土や砂利などの堆積物の間をうねうねと巡りながら流れている（のであまり見えない）。その中で、登封県の東南三十里のこの石淙は、嵩山の東の谷からの流れが、下って潁水に合流しようというあたりである。ここまで道筋は高低があり、くねくねと曲がっていたが、河川はどこでも陸地面から下位にあった。それがここに至って、流れが湧き上がるような岩々にぶちあたることになっている。それらの巨石群は、高い岸辺と深い谷の間に聳え立ち、一夫が関所や枢要の地を守っているかのような赴きである。川の水は、それらの巨石の根元あたりに至って沸き立っており、ここから水と石とが融和した世界が始まり、その美しさは様々な変化を見せている。

川の水を巡る両岸の崖は、あるいはカササギが屹立するかのよう、また雁が並び飛んでいるかのよう。水中にわだかまる巨石は、あるいは水を飲む水牛のよう、また伏せる虎のよう。低く小さいものは小島をなし、高く大きいものは平らな台をなす。石が大きくなれば、それだけ水面から高く遠ざかる。更にまた、その岩の中空には穴が穿たれ、石窟や石洞をなしているものもある。石と崖との距離を測ってみれば、わずか八尺ほどしかないが、蛇行する川の両端の最高距離を測れば、数十尺もある。

水が渓谷の中を流れ、石がその上に屹立している。石の姿は露出した骨のようであり、それに注ぐ水の流れは、骨を覆う皮膚のようであり、水と石とが調和した美しい景観を窮め尽くしている。全く予想もしなかったことだ、茅や葦の茂る水辺にあって、一瞬で眼の塵埃を洗い流すような、すばらしい光景に出会えるとは。

高い丘に登り、西に十里行くと告成鎮である。ここは昔の告成県の場所である。測景台がまちの北にある。

西北に二十五里行くと、中岳廟である。廟に東華門から入ったとき、既に太陽は沈もうとしていた。しかし、私は盧巖寺へ行くことを渇望していたので、すぐさま廟の東北へ山沿いの道を登っていった。幾重ものアップダウンがある山路を十里ばかり行き、転じて山に入ると盧巖寺に行き着いた。

盧巖寺を数歩出ると、ごうごうと音を響かせながら、せばまった石の間を落ちる瀧があった。両岸の峡谷の様は、水蒸気が充満していて、霞に被われているかのよう。瀧の流れを遡って寺の後ろ側へ行く。そこは谷底から崖がそそり立っていて、前面を半円形に取り巻き、上から覆い被さるようにのしかかって、下の方は削られて引っ込んでいるかの如くである。流れ落ちる瀧の水は、空を飛んで落ちてきて、美しい彩絹が舞い、たなび

いているかのようであり、細かな飛沫が谷中に充満している。その様は、武夷山の水簾洞にも劣らないものがある。ここでは水を得ることで奇勝をなしている。そして水はさらに岩石を得ることでよくなり、岩石も水のよさを助けている。水のよさを妨げることなく、さらに水を飛ばしているわけで、つまり武夷山よりも優れていると言えるのではないか。瀑布の下を徘徊していると、盧巌寺の梵音和尚が、お茶と点心でもてなしてくれた。（その後）急いで中岳廟に戻ったが、既に夜も更けていた。

［注］告成鎮―周の穎邑。戦国期には鄭に属し、陽城といった。唐の武則天が嵩山で封禅を行った際、告成県と改称された。　測景台―周公が洛陽建都の際に、時間と距離を測るのに立てたと伝える。今は台はなく、そのことを記した石碑が立つのみ。ただ、その近くには、元代の郭守敬らが建てた、観星台という天文施設が残る。これと混同しているのか。　盧巌寺―唐代に盧鴻一という隠者が隠棲していたという。

武夷山―福建省の名山。銘茶の産地としても知られる。　水簾洞―武夷山で「山中最勝之境」とされる名勝。数十メートルのドーム型の洞窟をなし、頂上から泉水が降り注いでいる。　梵音―盧巌寺の僧侶の名前だと思われるが不詳。

二月二十一日

早朝に、中岳廟に参る。

大殿を出て、東から太室山の頂上へ向かう。思うに、嵩山は「天地之中」と称されるところにあたっていて、祭りの等級としては五岳のトップである、だから「嵩高」と称される。少室山と対峙しており、山下には洞窟が多くある。そこで「太室」とも呼ばれている。この両室山が向かい合っている様は、まるで一対の眉のようであるが、少室山がでこぼこと高低があるのに対し、太室山は雄々しくすっくと聳えていて、自らの高い位を誇っているようであり、その厳めしさは屏風を背負って諸侯を謁見する帝王の趣がある。緑がかった山脚より上は、連綿と崖が途切れることなく横たわり、並んだ屏風や伸展された旗のようである。そこでことさらに厳めしさを感じ取るのだろう。嵩山が尊崇され封建されるのは上古よりであり、漢の武帝は「万歳」の声が起こったという奇瑞により、新たに祭祀都市を建設した。宋の時代は、首都の開封に近かったこともあって重視され、祭祀の典礼が完備された。今でも、嵩山の頂上には、鉄梁橋・避暑寨の名が伝わっている。これにより、最盛期の様が想起されるであろう。

［注］万歳の声―元封元年（前一一〇）の嵩山祭祀の際、武帝に随行した臣下達が、どこからともなく「万歳」の声を聞いたという。これを奇瑞と見た武帝は、嵩山への尊崇をより高くし、祭祀都市を建設した。

太室山の東南に延びる支脈があり、その端を黄蓋峯という。その峯の麓が中岳廟になる。廟は規模が広々として壮観である。庭中には石碑が多く立っているが、いずれも宋・遼以来のものである。

太室山に登る本道は、万歳峯の下にあって、太室山の真南に当たる。私は昨日、盧巌寺に行ったとき、先ず黄蓋峯（の側）を通り過ぎたが、その道中で秀でた峯を見た。それは中程から門のように裂けており、ある人が「金峯玉女溝」だといい、こ

こからも頂上に登る路があると教えてくれた。そこで樵夫を傭い、ガイドとして案内してもらうよう手配をしておいた。そして今、その道から登るのである。峯の秀でているところに近づいていくと、道が次第に切れ切れとなってきた。そこを避けようとするが、険しく切り立っていてそのまま越えることはできない。そこで北へ向かい土の山に取り付いてみれば、やっと登る手がかりを得られるほどの小道があった。二十里ばかりも進んで、ようやく黄蓋峯を越えた。そこは先に見た金峯玉女溝の上に出ていた。西へと狭い尾根道を越え、絶頂を目指して進む。

この日は濃い雲が墨を散らし塗ったようであったが、私は山行をやめなかった。それがこのころになって山中の霧が少し沈静し、やや開けると眼下に彩絹を連ねたり、玉を削ったような、重なる絶壁が見えたが、また霧が合わさると大海の中を行くのと同じような状態になった。

五里で天門峯に至った。その上の方も下の方も、重なる石の崖が続いており、路には多く雪が積もっている。ガイドが最も険峻なところを指さして、大鉄梁橋だと教えてくれる。そこから折れて西に三里行き、峯を廻って南に下ると登高巖である。いったい幽深さを帯びた岩はすっきりとしていないものが多いし、すっきりとした岩は曲がったり、ぼんやりとしていたり、それぞれが映え合うという趣を持ったものは少ない。しかしこの岩は、上は重なる崖によりかかり、下は絶壁に臨んでいる。また開いた洞窟の門は重なる山々が守っており、左右には台や屏風のような峯々が取り巻いている。

岩のあたりに入ると、深く大きな洞窟がある。洞窟は斜めに口を開いている。数歩入ってみると、崖が突然途切れて五尺ばかりの穴が出現した。足を置く間もないほどである。ガイドは古老の樵夫であるが、その身の軽さは猿のようで、体を傾けて躍り上がって対岸に飛びつき、そこにあった二本の木の枝を取って、臨時の橋としてくれる。そこを渡ると、ドームのような岩が上からのしかかってきて、その中に乳泉・丹竈・石榻などの名勝があった。

登高巖の側らからよじ登ると、またひとつの平台があった。谷の中に突き出していて、三面が空に懸かっているかのような絶壁である。ガイドが言うには「ここから下へは登封県城が見え、遠くは箕山や潁水が見える」と。しかしこの時は濃霧があたりに立ちこめ、全く何も見えなかった。巖を離れ、転じて北に二里で白鶴観の址に出た。そこは山の窪地にあって、険峻なところからは離れていて、平らな場所であり、一本の松がすっくと立っていて、ひろびろとした清らかな趣があった。

また北に三里登り、やっと頂上を極めた。三棟からなる真武廟があった。側らに井戸があった。水は甚だ清らかで透明である。御井と言う。宋の真宗（即位、九九七～一〇二二）が避暑で訪れた際、掘らせたものだという。

［注］黄蓋峯―太室三十六峯の一。最も東にある。　万歳峯―太室三十六峯の一。武帝時代に万歳の声にちなむ。　天門―徐霞客自身も後述するが、山頂に聳える門のように見える岩があり、仲秋のころ、山麓から眺めると、満月がそこから登り、あたかも玉鏡を嵌めたかのように見える。そこから中岳八景の第一として「嵩門待月」がある。白鶴観址―山頂にあった道教施設。周代の神仙李八百が煉薬していたとこ

ろ白鶴が集まってきたことからの命名とも、浮丘伯が王子晋とこもり白鶴に乗って昇仙したことにちなむともいう。　真武廟―真武君（玄武神）を祀る廟。

真武廟で昼食を取った。下山の道筋を問うと、ガイドが言うには「本道は万歳峯から麓に至るもので、二十里である。もし西の谷を滑り降りれば、路程は半分にできる。けれども路は険峻を極めている」と。私はうれしくなった。というのは、「嵩山に奇勝が少ないのは、険峻の地が少ないから」と思っていたからだ。（だから険峻の地を得られれば奇勝もまた得られると考えた。）そこで速やかにその道を選び、杖をつきながら進むこととした。始めはまだ岩に取り付き、石を踏み、密集した藪を開きながら下る程度であった。まもなく両側から石が迫っている間を真っ直ぐ下り始め、振り返って仰ぎ見れば、両側の崖壁が天を被い塞がんかという様である。これまでは、峯の頂上では霧の滴が雨のように垂れ込めていた。それがここに至って次第に開け、景色もだんだんとその奇異さを表してきた。けれどもずっと、急ですべり易い溝が続いていて、階段のような足がかりになるものはなく、自分でコントロールしながら進めないのはもちろんのこと、立ち止まることもできない。下れば下る程、崖の形勢はいよいよすごいものとなり、ひとつの峡谷を窮めたと思ったら、また次の峡谷が始まっているありさまである。あたりを見回す余裕はなく、一瞬たりとも足を止めることもできない。こんな調子が十里続き、やっと峡谷を抜けて、平地に至って、本道に出た。

無極洞（老母洞）を通り過ぎる。西へ向かって山嶺を越え、草ぼうぼうの中を足を急がせること五里にして、法王寺に至った。寺には金蓮花があり、特産で、他所には無いものである。雨が急に降ってきた。そこで僧人の小屋で雨宿りをする。東の方に石の峯が門のように向かい合って聳えているのが見えるが、新月の度に、その門の間から月が昇るのである。これが、嵩山八景のひとつ「嵩門待月」である。振り返るに、私が下ってきた峡谷は、見えている峡谷の上にあたる。今、麓で座って眺めてみると、ただ雲気が出入りしているだけのように見え、我が身がそこから降りてきたことなど想像のしようもないほどだ。

二月二十二日

山を下り、東に五里で、嵩陽宮の遺蹟に至る。三本の将軍柏だけが山のように鬱蒼と茂っている。漢代に将軍として封ぜられたものである。最も大きいものは大人七抱え程の太さがあり、中くらいのものは五抱えほど、最も小さいものでも三抱えほどである。将軍柏の北に、三間の室がある、程明道程伊川両先生を祀る。柏の西には昔の建築物の柱が一本残っているが、あらかた地面に埋もれている。宋代の人の題名が書かれているが、判別できるのは、范陽（河北省）の祖無擇・上谷（河北省）の寇武仲及び蘇才翁ら数人のみである。柏の西南には雄壮に聳える石碑があり、四面に彫られた龍の彫り物が誠に精巧である。これは唐代のもので、裴迥が文章を撰述し、徐浩が八分体で揮毫したものである。

また東に二里行き、崇福宮の遺蹟を通る。ここはまた万寿宮とも言う。宋代に宰相が業務を行った場所である。

さらにまた東に、啓母石がある。数間の家屋程の大きさである。そばに、砥石のように平らな石がある。

また東に八里進み、中岳廟に帰り着いて昼食を取る。ここでは宋代元代の石碑を鑑賞する。

西に八里で、登封県城に入る。

（県城を抜け）西に五里進み、小道を西北に行く。

また五里で、会善寺に入る。「茶榜」の碑が寺内の西の小屋にある。元代の刻である。その後ろに、壁の下に倒れている石碑がある。唐の貞元年間の「戒壇記」である。汝州刺史の陸長源が文章を撰述し、河南の陸郢が揮毫したものである。

また西に戒壇の遺蹟がある。残る石材に彫られた彫刻は精巧を極めているが、いずれもバラバラになって地面に遺棄されいてる。

西南に五里行くと、大きな道に出た。

また十里で、郭店に至る。ここから西南に折れれば、少林寺への道である。

五里で少林寺に入る。瑞光上人の宿坊に泊まる。

［注］嵩陽宮―今、嵩陽書院のあるところ。北魏に嵩陽寺が建てられ、隋代に嵩陽観という道観となり、五代に講学の場となって太乙書院となった。宋代に嵩陽書院となり、程子兄弟や司馬光なども講学し、四大書院に数えられた。　将軍柏―漢の武帝がそのすばらしさから将軍に任じたという伝説がある。　祖無擇―宋代の文人。「宋史」巻三三一本伝。　寇武仲―不詳。　蘇才翁―宋代の文人。「宋史」巻四四二文苑伝。裴迴―唐の文人。彼は碑文の文章を撰したのではなく、揮毫した。

徐浩―唐の文人。書を善くした。　崇福宮―武帝が山麓に万歳観を作らせたのが始まり。その後太乙祠・太乙観と名を変え、宋代に崇福宮となる。明末には凋落していた。　啓母石…禹が治水事業のために熊に変身していたところ、妻の涂山氏がそれを見てしまい、獣に嫁いだことを恥じて嵩山の麓で石になってしまった。丁度妊娠していたため、禹が「子どもを返せ」と呼んだところ、岩が割れて息子の啓が生まれたという。　会善寺―北魏に離宮が建てられたのが始まり。のち寺院となり、隋代に会善寺の名を賜る。　陸長源―唐代の政治家。「唐書」巻一五一本伝。　瑞光上人―不詳。

二月二十三日

雲も霧もすべて散って消えた。少林寺の正殿に入り、仏を礼賛し終えてから南寨に登ることにした。南寨は、少室山の絶頂で、高さは太室山と同じくらいであるが、尖った峯が高く抜きんでている。「九鼎蓮花」の名を冠されている。少室山の後ろを低く取り巻くのが九乳峯である。うねうねと伸びて東の太室山まで続いている。その北に少林寺がある。

少林寺はとても荘重秀麗であり、庭院には新旧の石碑が荘厳に立ち並び、全くすばらしい。台の部分の両側に二本の松があり、高く雄大に伸びていて整っており、寸法を測ったかのようである。ここから少室山が目の前に横たわっている。振り仰いでも頂上を見ることができない。遊覧に来た者は、壁に向かって立っているようである。そこですぐに思った「少室山は遠景こそ勝る」と。

私は昨晩少林寺に着いたとき、すぐに少室山への道を聞いたところ、誰もが「雪が深く道も途絶えており、行くのはよくない」と言った。確かに一般には、山に登るのは晴朗の時がよい。しかし私が太室山に登ったときは、雲や霧が立ちこめていた。あるいは「山の神が遊客を拒んでいるのであり、この山の雄偉高大さを知らせたくなかったので、ただ山の半面だけを見せた」ということなのかもしれない。しかしもしも少室山が、その優美さを映えさせることに優れていたならば、少々の雲があったとしてもその美を損なうことはできないだろう。まして今はとても晴れており、最高のチャンスである。どうして行くのを阻めようか。そこで寺の南から山澗を渡って山に登る。

六七里で、二祖庵である。山はここに至って急にすっぱりと土気がなくなり、石だらけとなる。石の崖が下に落ち込んで竪穴を成している。竪穴の中程に泉があり、その水が湧き出して岩石を突き破って飛び、流れ落ちている。ここも亦た「珠簾」と命名されている。私はただ一人で杖をつきながら進んだが、下れば下る程道がなくなり、しばらくしてようやく崖の底にたどり着いた。この岩の高さ大きさは盧巖にはかなわないが、その幽深さ険しさはこちらの方が勝っている。岩の下には青々とした深い淵があり、その四周には積雪が固まっている。

再び岩を登り、煉丹台に至る。台の三面は絶壁をなし、一面だけが青々とした崖によりかかっている。上に亭があり、小有天という。これまで探幽の客で、ここに至ったものは誰一人いない。ここから先は、石の尾根上を、振り仰いで石にかじりつき真っ直ぐに登る。左右両側は万仞もの切り立った崖で、その接合部分が尾根であるが、その幅は一寸ほどもない。手の力が尽きたら足を用い、足の力が尽きたら手を用いと、全身の力を振り絞って、ようやく登ることができた。

七里ほどで、ようやく大峯にたどり着く。大峯の地勢は平らでひろびろとしており、先ほどまで険しい岩がごつごつしていたのが、突然変わって一面が土に被われている。草や荊が茫々と生い茂る中を南に登ること五里ばかりで、ようやく南寨の頂に着く。岩を被っていた土もここでは全く無くなった。

南寨は実は少室山の北頂である。少林寺から言えば、「南の寨」となるということだ。おおよそその頂は、中頃から裂けており、南北二つの部分に横ざまに断裂している。北側の頂は広げた屏風のようで、南側の頂は矛戟を並べて対峙するかのよう。両者の間は八尺から一丈ほどしかなく、そこは深い崖谷となって、断ち切ったように険しい。両側の崖に挟まれた谷底から、一座の山峯が突起していて、他の諸峯から高く抜きんでている。これがいわゆる「摘星台」である。少室山のまさに中央である。その絶頂は北側の崖とつかず離れずの形勢で、両者は断絶していて渡ることはできないようだ。しかし絶頂の下あたりを見下ろしてみると、糸一筋くらいで北の崖とつながっているところがあった。そこで私は衣を脱いでそこによることにし、台の絶頂に登った。すると南側の頂である九つの峯が目の前に森林のように立ちふさがり、後ろには北側の頂が屏風のように横様に広がり、東西はどちらも深い竪穴となっていて見下ろしても谷底が見えない。そこへ神仙が乗るような強い風が吹き寄せてき

たが、あたかも羽毛を借りて飛び去らんかのようであった。

［注］二祖―禅宗二祖の慧可。

南寨から東北に転じ、土に被われた山を下ると、にわかに升ほどの大きさの虎の足跡を見つけた。草ぼうぼうの中を更に五六里いくと、茅屋があった。そこで宿を借り、火をおこして持参した米を炊いてお粥を作った。三、四杯すると、飢えや渇きがすっと消え去った。庵の僧侶に、龍潭へ至るの道を質問する。

一座の峯を下る。峯の背（尾根）はだんだん狭くなり、土と石とが交互に交じり、其の上を荊が伸びて被っている。そんなところを枝に手を掛けながら進んでいくと、突然一万丈もの崖が出現し、渡れそうもない。そこで道を転じて登っていく。峯の勢いがうねうねと伸びているところを見上げながら走り下ると、先の所と同じように石の崖が削られている所に出た。行ったり来たりを数里以上も繰り返し、やっと窪地を迂回できた。更に五里で道路に出ると、そこが龍潭溝である。振り仰いで、先に道に迷った所を眺めてみると、険しい崖や斜めに飛び出した石が万仞ほどの切り立った高い障壁の上にあった。清流が其の中から吹き出し迫り、鬱蒼と緑が茂る険しい石の壁に降り注いで、色彩豊かな美しい霞を形成している。峡谷は谷川を挟みながら曲がり、両岸に建つ僧侶や道士の庵が、蜂の巣や燕の巣のように見える。おおむね五里ほどで、深くまた緑の濃い一龍潭がある、その深さは丈の単位では測りきれない程である。更に二つの龍潭を経由して、ようやく峡谷を出る。この日も少林寺に泊まる。

二月二十四日

少林寺から西北に行き、甘露台を通り過ぎ、さらに初祖庵を通り過ぎる。北に四里で、五乳峯に登り、初祖洞を探索する。洞は深さが二丈、広さはそれよりも少し減じる。達磨大師が九年間壁に向かって座られたところである。洞の門は、下の方では少林寺に臨み、遠く少室山と向かい合っている。ここには泉水がない、だから今は棲む人もいない。下って初祖庵に戻る。庵の中に達磨影石が供えてある。石は高さは三尺もなく、表面は白い中に黒い模様があって、荘厳な胡僧の立像である。庵の中殿に六祖が手ずから植えられた柏がある、その大きさはすでに大人三抱えほどもある。石碑によれば、慧能が鉢に入れて広東から持ってきたものだという。台を夾んで立つ二本の松は、少林寺に於けるそれに次ぐものである。少林寺の松はすべて真っ直ぐ高く伸びていて、中岳廟の松が倒れ傾いたり、曲がったりしているのとは異なる。ここ初祖庵の松も、直立していて中岳廟のものとは異なる。庵を下って甘露台に至る。土の丘が盛り上がり、その上に蔵経殿がある。台から降りて三層の殿宇を廻る、碑刻があちこちに散在していて、見て回る時間が足りないくらいである。その後ろは千仏殿である、その雄壮華麗さは比すべきものがないほどである。殿を出て、瑞光上人の房で昼食を取る。そして出発し、馬を急がせて登封県からの大道を走り、轘轅嶺を通り過ぎ、大屯で宿泊とした。

［注］初祖―禅宗を開いた達磨大師。　六祖―慧能（六三八～七一三）。

二月二十五日

西南に五十里行くと、山が突然途切れた。こここそ伊闕（龍門山）である。伊水が南から流れてきて、この下を流れるが、水深は数石の穀物を積んだ船を浮かべられるほどである。伊闕は山が連なっているが、東西に横にまたがるように、伊水の上に木を編んだ橋を架けている。この橋を渡ると、崖が更に険しく聳えている。一座の山がみんな削られて崖状になり、崖いっぱいに仏像が彫られている。大きな洞は数十あり、それぞれの高さは数十丈もある。大きな洞がある外側の崖壁は、そのまま頂上まで続いており、頂上付近にも小さな洞が彫られており、それぞれの洞に、すべて仏が彫られている。僅かな表面でも彫られていないところは無く、眺めるととても数え切れるものではない。洞がある左側に、山から流れ落ちる泉水があり、貯まって四角い池をなし、あふれた水は伊水に流れ入る。山の高さは百丈にも及ばないのに、清流はさらさらと途切れることはない。これこそこの場所が得難いものである点である。ここ伊闕の地は、人車の往来の激しいところで、湖北と河南を結ぶ大道にあたり、西北に行けば関中・陝西へと通じる。私はここから西岳への道を取って行く。

注

（1）「埼玉大学国語教育論叢」第十四号に「遊天台山日記」を、「埼玉大学紀要（教育学部）」第六十一巻第二号に「江右日記」の前半を訳出している。以下、順次訳する予定である。なお、詳注訳を、ウェブサイトに掲載する準備を進めている。

■参考文献

●訳注

徐兆奎注釈『徐霞客名山遊記選注』中国旅遊出版社、一八五二年（注のみ）

周暁薇等訳注『徐霞客遊記選訳』巴蜀書社、一九九一年。修訂版、鳳凰出版、二〇一一年（注と訳）

朱恵栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年（注と訳）

黄坤『新譯徐霞客遊記』三民書局、二〇〇二年（注と訳）

黄坤選評『徐霞客遊記　選評』上海古籍出版社、二〇〇三年（注のみ、部分）

朱樹人選釈『徐霞客遊記』崇文書局、二〇〇七年（訳のみ）

朱復融訳注『徐霞客遊記』広州出版社、二〇〇八年（訳のみ）

湯化等注評『徐霞客遊記』鳳凰出版社、二〇〇九年（注のみ）

●地図類

丁文江撰『徐霞客游記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年

褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地図出版社、一九九一年